

Title	「文化的リテラシー」論におけるコスモポリタニズム： E・D・ハーシュ・ジュニアの考察を通して
Sub Title	An understanding of cosmopolitanism in the literacy debate : ideas of E. D. Hirsch, Jr.
Author	翟, 高燕(Zhai, Gaoyan)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2016
Jtitle	哲學 No.136 (2016. 3) ,p.49- 67
JaLC DOI	
Abstract	This study presents a review and assessment of cosmopolitanism. The existing image of E. D. Hirsch, Jr. is a conservative one in the field of multiculturalism research; however, it will potentially alter using the interpretations of Hirsch's cosmopolitanism. The first section of this study describes a review of diversity and unity in the United States into understanding the multiculturalism. The second section analyzes Hirsch's understanding of cosmopolitanism in contrast with that of Apple's. In conclusion, this study discusses a new interpretation of Hirsch's cosmopolitanism in the field of multicultural research.
Notes	特集：教育学 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000136-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「文化的リテラシー」論における コスモポリタニズム

——E・D・ハーシュ・ジュニアの考察を通して——

翟

高 燕*

An Understanding of Cosmopolitanism in the Literacy Debate: Ideas of E. D. Hirsch, Jr.

Gaoyan Zhai

This study presents a review and assessment of cosmopolitanism. The existing image of E. D. Hirsch, Jr. is a conservative one in the field of multiculturalism research; however, it will potentially alter using the interpretations of Hirsch's cosmopolitanism. The first section of this study describes a review of diversity and unity in the United States into understanding the multiculturalism. The second section analyzes Hirsch's understanding of cosmopolitanism in contrast with that of Apple's. In conclusion, this study discusses a new interpretation of Hirsch's cosmopolitanism in the field of multicultural research.

Key Words: cultural literacy, multiculturalism, cosmopolitanism, diversity, unity

* 元慶應義塾大学通信教育部非常勤講師

1 はじめに

本稿の目的は、1990年代のE・D・ハーシュ・ジュニア（E. D. Hirsch, Jr.）による「文化的リテラシー」（cultural literacy）論におけるコスモポリタニズム¹⁾（cosmopolitanism, 世界主義）理解を明らかにすることである。

世界が多様化するにつれて、教育のあり方も複雑になっていった。しかし、「多様性」（diversity）を強調する際に、それと対をなす、国家の「統一」（unity）に関する理解はどのように展開されるのかが常に議論されている。本稿はこの「多様性」と「統一」を統合したハーシュのコスモポリタニズム理解を明らかにする。そして、これを明らかにすることで、アメリカ合衆国の多文化主義（multiculturalism）論争におけるハーシュの位置づけを明確にする。

今日に至るまで、政治学の観点からは多くのコスモポリタニズムに関する検討がなされてきた²⁾。一方、教育学の視点からコスモポリタニズムが議論されたことは少ない。この数少ない研究の中で、ハーシュはコスモポリタニズム理解を構築していった。このコスモポリタニズムを二者択一ないしは、「統一」の論調だと言って批判する議論が多数を占める。特に、「批判的リテラシー」（critical literacy）論者による批判が目立っている。その中、M・アップル（M. Apple）は「他者」の視点から、ハーシュによる理論の「不平等」理解は多文化主義を認めないことから生まれたと述べた³⁾。アップルによれば、ハーシュもその一員である新保守主義者は、概してバイリンガリズム、多文化主義を攻撃する傾向が強いという。そして、このような傾向は新保守主義者たちの「他者」への恐怖心の表出に他ならないと指摘する⁴⁾。言い換えれば、ハーシュのような新保守主義者は「他者」から抵抗を受け、「自己」の席が奪われるのを恐れている。しかし、この「他者」と「自己」の分類は自明ではない。すなわち、「自己」から「他者」を除外するのか、あるいは「他者」から「自己」を除くのか

というのは二者択一の考えであり、そこでは誰が「自己」で、誰が「他者」であるのかは明らかではない。明確に線引きした「自己」と「自己」以外の集団という分類は、むしろはエスノセントリズム⁵⁾ (ethnocentrism, 自文化中心主義) ともいえる。

そのうえ、K・L・プラス (Kristen L. Buras) は、ハーシュを新保守主義の多元文化主義の一員として認識し、ハーシュを「統一」を強調する論者だと位置づけた。プラスは下位における世界主義的な多文化主義 (subaltern cosmopolitan multiculturalism) 概念を出して、権力関係を打破するコスモポリタニズム的な多文化主義の必要性を訴えた。いわば、多文化主義を明らかにするために、単に民族、人種だけの「多様性」に着目するより、ジェンダー、文化などを含んだ複合的な「多様性」に着眼した議論が必要なのである。

このように、先行研究は多文化主義の観点からハーシュを偏りのある論者として位置づけてきた。しかし、ハーシュをこのように位置づけている論者達の理論自体は「統一」による偏りの議論である。本稿は、ハーシュが「統一」という偏りを超越した論者であることを明らかにするために、今日までなかった「多様性」のキーワードから、コスモポリタニズム理解に着眼する。実際には、ハーシュの「文化的リテラシー」論は「自己」と「他者」の二者択一ではなく、「多様性」と「統一」を統合した理論である。これらを明らかにすることで、ハーシュによるコスモポリタニズムが多文化主義より、さらに一步進展したものであったことを結論づけたい。

以下、本稿はまずアメリカ合衆国における「多様性」と「統一」に関する議論の歴史的な変遷を概観する。歴史的な概観を通して、今日までの議論における問題点を整理する。そのうえ、批判的多文化主義 (critical multiculturalism) との比較を通して、「多様性」か「統一」かという二者択一の図式を克服するためのハーシュのコスモポリタニズム理解を明らかにする。最後に、今日までの議論におけるハーシュの位置づけを鮮明にする。

2 アメリカ合衆国における「多様性」と「統一」の問題

アメリカ合衆国において、「多様性」と「統一」の関係は社会における難題である。この「多と一」について、1991年、歴史学者のA・M・シュレジンガー・ジュニア（A. M. Schlesinger, Jr）は「多様性」に注目する民族主義について、以下のように警告した。「私たちは、このきわめて多様化した社会をなんとか一つにまとめてきた統合の理念を犠牲にしてまでも、民族や人種のテーマを拡張すべきだとは思わない。共和国は、『多と一』の間の均衡を維持してきたがゆえに、生き残り、そして発展してきた⁶⁾。このように、アメリカ合衆国は「多様性」と「統一」の統合体として発展してきたが、その「統合」関係において、片方だけ注目する風潮も少なくない。

さらに、多文化教育論の創設者であるJ・バンクス（James A. Banks）によれば、民主社会において「多様性」は必須である。「多様性」が存在するために、市民共同体より高次の理念が必要となる。この高次のものは民主主義である⁷⁾。国において、文化・民族・人種・言語と宗教の「多様性」が存在している場合、どのように「多様性」と「統一」のバランスを保つのかは問題である。「統一」だけがあり、「多様性」がなければ、覇権と抑圧は問題となり、「多様性」だけがあり、「統一」がなければ、国家は分裂する。「統一」対「多様性」、国内的多文化主義（domestic multiculturalism）対世界的多文化主義（cosmopolitan multiculturalism）は公民教育の課題である⁸⁾。バンクスによれば、「多様性」の特徴を持つ国家にとっては、多様な集団がそれぞれの文化的な特徴を持つと同時に、国家にも融合できるようにさせることが重要である。これを実現するために、集団という考えを前提に、各集団の権利を保障することは実質的な平等を実現するのに重要である⁹⁾。また、多様な集団の存在を認めつつも、それらの集団の「統一」を強調している。すなわち、自分の集団と自分以外の集団という分け方より、全体をまとめる構造が必要とされる。以下、

多文化主義の歴史的な系譜に沿って、この複雑な「多様性」と「統一」の変遷をみていく。

2.1 文化多元主義時代における「多様性」と「統一」の問題

1920年代のアメリカ合衆国で、ヨーロッパから来た移民たちを「アメリカ化」する運動が始まった。1909年の移民作家I・ザングウィル(I. Zangwill)は『メルティング・ポット』(The Melting Pot)の脚本において、アメリカ合衆国がすべての「ヨーロッパ人を溶かして、そして再生(reforming)する偉大な『人種のるつぼ』(melting pot)」¹⁰⁾であると述べ、持論を展開した。その後の第一次世界大戦時、参戦の関係で西洋文明を守るという正当な理由からアメリカ合衆国で西洋中心の単一文化主義が形成された¹¹⁾。保守派は、アメリカ合衆国を多文化社会として捉える概念を高等教育で行う必要性を説いた。多文化社会は西洋文化を礎とする一方、非西洋の文化を共通文化に付加するものとしてとらえていた。一方、革新派は多民族の視点から西洋文化のみならず非西洋文化まで重要視すると述べた。アメリカ合衆国という多文化社会において、多様な人々の「共存」、「共生」を可能にする市民の育成が教育課題とされた。

その後、アメリカ政府は1964年に、抑圧された集団を対象に『公民権法』に基づいて、アファーマティヴ・アクション(Affirmative Action)政策を実施した。この政策は、補助的な手段で抑圧された集団の平等を実現するために設置されたものである。これは文化多元主義(cultural pluralism)の始まりである。この文化多元主義における「多様性」と「統一」について、藤本龍児は次のように論じていた¹²⁾。「文化多元主義は、アメリカ社会のなかに多様な文化、すなわちさまざまな『差異を承認』することこそ、アメリカ合衆国のナショナル・アイデンティティである」¹³⁾。「ところが、そう主張するならば、そこには『差異を共通性の基盤とする』という矛盾が生じてしまうことになる」¹⁴⁾。「多様性」と「統

一」を同時に成り立たせるためには、「文化多元主義は、その矛盾を調停するために、『差異を承認する次元』と『共通性を担保する次元』を区別する」¹⁵⁾という理論構成をとった。この差異と共通性は「民族性」と「国民性」として理解できる。「民族性」は、他者や他の文化からの干渉をまぬがれる事柄であるとし、それを「私的領域」に位置づけた。「国民性」は、他者や他の文化との交渉によって形成されたり維持されたりする事柄であるとし、それを「公的領域」に位置づけた¹⁶⁾。こうした思想が、文化多元主義にほかならない。藤本は民族性と国民性の二次元から、差異と共通性を同時に保つ文化多元主義の論調を明らかにした。

藤本は二次元的に差異と共通性を保つと述べたが、具体的にはどのような差異、そしてどのような共通性があるのかということ是不明である。「文化多元」という言葉には、単に民族と国民に特化したものではなく、人種、性別、言葉など複合的なものが含まれている。単純に民族と国民の二次元に特化して論ずるのは狭い意味での理解ともいえるだろう。さらに、この文化多元主義には、文化を最初に出して、多元を後に付け加えることには、アメリカ合衆国という国民を前提に、「多様性」はその後付加された物として理解されても無理はない。この文化多元主義について、松尾知明は以下のようにまとめた。「文化多元主義には、集団間の権力作用という視点の欠如が挙げられる」¹⁷⁾。すなわち、主流集団の文化は社会全体の規範として普遍化される一方、そうした文化的基準に合わないマイノリティ集団の文化は排除される傾向にある。

2.2 多文化主義時代における「多様性」と「統一」の問題

以上のように、1980年代半ば頃まで、多文化の共存と共生をめぐる議論では、多様な文化集団が独自のアイデンティティあるいは文化を維持しながら平和的に共存するというモデルを支持する文化多元主義という理念がしばしば使用されていた。しかしながら、1980年代後半以降は全米に

において、文化多元主義に代わって多文化主義という用語が頻繁に使用され、その概念が盛んに議論され始めた¹⁸⁾。

多文化主義は文化多元主義の欠点を克服する理念として登場した。松尾の理論によれば、多文化主義の理念的枠組みにおいて、権力関係はより平らな構造に基づくため、一つの中心を持たず、比較的に小さな多数の権力関係が存在している。それらの権力関係における軸は、人種・民族だけでなく、ジェンダー、階級、セクシュアリティなど、複数に持つことが可能である。そして、多文化主義は、集団の同一性や共通性を基礎にした文化多元主義とは異なり、集団内の多様性や異質性を尊重する。第三に、多文化主義は、本質主義に反して、ハイブリディティを基調にした多文化共生コミュニティを構想する¹⁹⁾。ここでのハイブリディティは、集団に固有な文化が存在するような文化多元主義の集団観を排し、集団の文化は、借用、模倣、交流と創造によって歴史的に形成されたものであるという考えに基づくものである。こうしたハイブリディティを基調に、多文化主義は本質主義を克服することができ、文化の「多様性」が認められる社会の構築を目指すことになる。

これらの議論を背景に、多文化主義も五つの論調に分類されている。保守的多文化主義 (conservative multiculturalism)、自由主義的多文化主義 (liberal multiculturalism)、多元的多文化主義 (pluralist multiculturalism)、左派の本質論多文化主義 (left-essentialist multiculturalism) と批判的多文化主義²⁰⁾ である。これらの多文化主義はアメリカ合衆国の歴史とともに変遷してきた。さらに、多文化主義は、アメリカ人を解体に導くのか、それとも「多様性」に配慮して統合していくのかによって議論が分かれている²¹⁾。

この多文化主義においては、「多様性」についての理解も多岐にわたっている。J・L・キンチェロ (J. L. Kincheloe) らによれば、保守的な多文化主義は、白人文化に着眼していて、「多様性」についての理解を持たな

い、自由主義的多文化主義は、市場原理にまかせ、表面上は「多様性」を強調しているにもかかわらず、本質はヨーロッパ中心である。一方、多元的多文化主義は、差異を強調しているにもかかわらず、元来の社会状態を維持する考えを持っている。「多様性」を主張すると同時に、包摂性 (inclusive) の重要さも論じられている。自分の文化を心理的に認可すること (psychological affirmation) に止まり、政治上の変革 (political empowerment) をしない²²⁾。これは安全な「多様性」(safe diversity) と呼ばれ、リスクのない「多様性」である。左派の本質論的多文化主義者は、二元論的な「多様性」理解を持っている。主流文化が悪、非主流文化が善という論調である。文化は複合的な概念であり、そして歴史的な変遷に伴って形成された概念であるという理解である。左派の本質論者はそれを平面的なものとして理解し、単純的に二元化してしまった。「こうした本質主義に基づく集団観は、集団の差異を『歴史』としてではなく『自然』として固定化・普遍化させ、集団外に対しては排他的、差別的であり、さらに集団内の多様な声に対しては抑圧的である」²³⁾。この左派の本質論を乗り越えたのは批判的多文化主義である。批判的多文化主義は、階級、性別そして人種の複合的な文脈を入れ、多様な社会環境で再現され、社会正義と平等を実現することを目的としている²⁴⁾。

このような多文化に関する議論の流れをみると、国民に関する「統一」の偏りにより、多文化主義論も多様化されている。以下ハーシュのコスモポリタニズム理解から、このような偏りがどのように解消されているのかをみていく。

3 「多様性」と「統一」の乖離を克服するコスモポリタニズム

上記の社会背景にあるように、伝統的な多文化の問題を類似か差異か、全体か断片か、同化か非同化か、あるいは画一性か「多様性」かというような、二者択一の問題として捉える場合は多々ある。ハーシュは、こうし

た問題を俯瞰的な視点から考え、すべての階級と人種民族集団に属する人々の歴史的な背景を無視していない。ハーシュによれば、社会の「統一」の過程において、共通の基盤が必要である。共通の基盤を持ちながら無作為に多様なものを取り入れることがハーシュの言うコスモポリタニズム的な考えである。

3.1 ハーシュのコスモポリタニズム

ハーシュは大きな範囲における多様な集団を注目している。さらに、これらの集団同士について、ハーシュは明確な線引きで区別していない。すべての集団を同じような対象として扱い、「自己」と同じでない「他者」が「自己」と同様になれるようなコスモポリタニズム理解を形成してきた²⁵⁾。

コスモポリタニズムは、国家や民族という限定した範囲を乗り越える考えであり、人類全体を網羅する考えである。それと対照的なのは、エスノセントリズムである。これは一つの国家や一民族の限定した範囲における考えである。この二つの理解に基づく多文化主義の範囲は異なる。エスノセントリズムとしての多文化主義は、アジア人である、または、アメリカ人である、といった個々の文化的属性を強調するものである。同じ国でも、それぞれの民族はそれぞれの文化的な特徴を持っている。国別でも同様である。コスモポリタニズムとしての多文化主義は、個別の文化的な属性より、世界におけるすべての人の総括的な属性を強調するものである。こうした観点から、コスモポリタニズムは広義の多文化主義、エスノセントリズムは狭義の多文化主義とも理解できるだろう。

この広義の多文化主義を出発点として、ハーシュは社会における文化がどのように変容されていくのかについて、二つのレベルから論じた。ハーシュは「国家の文化」を中心に据えながらも、「文化的リテラシー」は人種・階級・地域・知的水準などによって限定される一つの集団に専有され

るべきではないと繰り返し強調した。ハーシュのこの議論について、P・ダウギル (P. Dowgill) らはその国におけるすべての人による「世界的な第二の文化」(universal second culture)が必要であると述べた。この「世界的文化」(universal culture)に関する知識は異なる集団間の有効的な交流を実現するための必須条件である²⁶⁾。この文化は、図1の右側で示されているように、国家文化という大きな枠組みの中で、地域文化、民族・人種文化、多様な集団文化の相互作用を指している。さらに、世界的な第二の文化は、個別の集団以外の文化のことを指す。それぞれの集団が持っている文化に影響され、新たに形成された統一的な文化でもある。一方、ハーシュによる高水準の文化変容と対照的に、国家文化と地域文化など他の文化が一体化された状態で認識されている。普通の認識では、これらのグループ間にはコミュニケーションの基盤がないので、それぞれ自由に交流することが出来ない。ハーシュによる文化変容は一つの大きい範囲における「多様性」を認めつつ、共同的な基盤を提供する構想である。

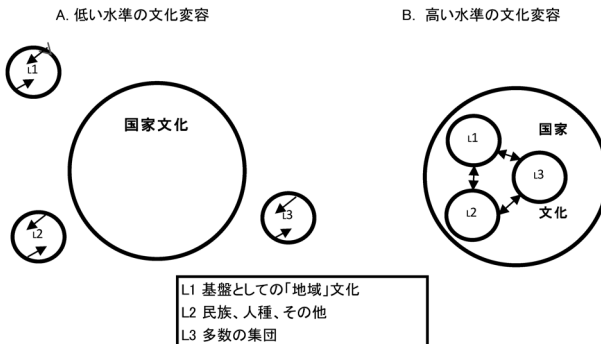


図1 文化変容図

A: 異なるグループは、国家共有文化の外で、グループ間のコミュニケーションが自由に発揮できなかった。

B: 共有の国家文化が教えられた異なるグループは、コミュニケーションとより良くなる学習の基礎を持つ。

出典): Dowgill, P., & Lambert, D. (1992). "Cultural Literacy and School Geography," *Geography*, 77(2).

この文化について、ハーシュは、「世界における多様な文化に対応する知識と、その文化に共感」し、「世界の主流文化に対し、それぞれの子供の出自となっている文化に対する敬意を深め」、「その国の経済的、且つ知的なディスコースで優位に立つ言語と、現存のシステムの中での競争力をすべての子供達に与える」²⁷⁾ものであると強調した。ハーシュは、コスモポリタニズム的な多文化主義を前提にし、すべての子供に教育機会を与えることを強調した。単に主流文化を強調するだけでなく、あらゆる子供を対象に、アメリカ合衆国における多様な文化の存在を尊重している。コスモポリタニズム的な多文化主義の理解に基づき、ハーシュは共通のコミュニティにおける多様な交流を推進している。ハーシュは個人の権利や自由という一つの価値を絶対化するより、個人の権利を多様な価値（善）の中の一つと見なしつつ、異なる価値観や宗教観の中で、重なり合う合意点を見出していく方針を提唱している。このコスモポリタニズムの中核は差異を尊重する態度や差異から学ぼうとする態度である。

3.2 ハーシュのコスモポリタニズムに対する批判

1980年代のアメリカ合衆国では、多文化を選ぶのか単一文化を選ぶのかということについて、社会的にも、政策的にも議論されている。このような社会背景において、学術界でも多文化主義と、アフリカ中心主義やユダヤ文化主義との対立が目立つ。すなわち、アメリカ合衆国という前提においては、多様な文化を論じるか、各民族各自の文化を重視し、それぞれの文化を中心に発展していくのかということが問題であった。特に、ハーシュの「文化的リテラシー」論をめぐることは、一集団を主流にし、他の集団をサブにしているという批判は多々である。具体的にいえば、非マジョリティの立場から、「ハーシュの理論は特定集団の知識を優位にし、その他の集団を無視するもの」と評価したものである。

批判的解放多文化主義・批判的多文化主義 (critical emancipatory

multiculturalism or critical multiculturalism) を支持する論者たちは、ハーシュの「文化的リテラシー」論の歴史用語などの選択が支配者層グループに偏ったものであると激しく批判した²⁸⁾。批判的多文化主義者たちは規範によって作り上げた差異に対し、複雑な社会的・政治的関係は視野の外という限界に真っ向から取り組んだ。多数派集団は、少数派集団よりも優等な存在価値を加えることで、「マジョリティ」としての感覚を作り上げていくという「権力関係」を構築することを強調している。

同じく松尾は単一文化主義と多文化主義をめぐる歴史的展開を整理し、共通文化の議論においてハーシュを「国民文化としての語彙リストの習得を求める」²⁹⁾ 学者として位置づけた。松尾は、初等中等教育段階における文化戦争に関わる論者たちを、ハーシュのような保守派と革新派に二分化した。松尾によれば、保守派はインクルージョン式のカリキュラムを採用し、共通文化という接着剤を核として、非西洋のものを否定しない³⁰⁾。このようなカリキュラムはすべての文化を排除しないで、それらを含むカリキュラムのことである。一方、革新派はトランスフォーメーション的なカリキュラムを採用している。ここでのトランスフォーメーションは固有のカリキュラムを打破し、新たなカリキュラムを作成していくことである。すなわち、固有の支配的なカリキュラムを変換していくことである。革新派としての多文化主義は「アメリカの物語を継続的に検討・修正し、さまざまな文化集団を包摂したものを改訂していく」³¹⁾。このように、松尾はハーシュを優位な立場に立って、他のカリキュラムを包摂する保守派としてみていた。

結局、これらの批判はハーシュの「文化」を論じていると同時に、ハーシュを「統一」の立場に置き、その「統一」に、「多様性」の文化を軽視し、抑圧する傾向があると論じている。ハーシュはどのようにこれらの批判を乗り越えているのかについて、以下、本稿は批判的多文化主義者であるアップルとの比較を通して、ハーシュによるコスモポリタニズムの特徴

を一層明確にする。

3.3 「自己」と「他者」理解におけるコスモポリタニズムと批判的多文化主義の比較

「多様性」と「統一」におけるハーシュの理解をより鮮明に打ち出すために、まず、多様な関係における「自己」と「他者」の理解からみていく。ハーシュはコスモポリタニズムの理念のもとで、自分の「文化的リテラシー」論の実践を行った。ハーシュの主旨は、平等と信頼を前提とした多文化主義の教育を実施することである。コスモポリタニズムは人種、宗教間の垣根を克服している同時に、否定的・対抗的な「自己」と「他者」という分類をしていない。

この「自己」と「他者」について、アップルによる多文化主義の理論構造における関係は両極化されている。優位集団と非優位集団という二極化の図式である。この理論における「多様性」も二極化された理解である。アップルによれば、「一部の研究者という普通の席より有利で、高いところに設置されて席がある。このような研究者が一般庶民の立場に立って、発信することはできない」³²⁾と述べ、社会の「平等」理解は「自己」自身のいる立場によって異なると主張した。アップルの議論によれば、「多様性」において、個々の集団は平等で、個々の集団を「他者」として捉えるべきではない。「他」の庶民は「自己」と対等で、研究者は庶民と同じ立場に立って物事を考える必要があるという³³⁾。アップルは、庶民と同じ条件を有することによって、庶民と同じ立場にいることが「平等」を実現する大前提だと認識している。ここで、アップルのいう庶民と同じ立場にいるということは、劇場に例えるならば、普通席にいる「他者」の要望に応え、「自己」のいる「個室」のような高級な席から降りていく状況である。「他者」と同様であると同時に、「他者」に重点を置くことが一番肝要である。

一方、ハーシュはバランスのある「多様性」を注目している。アップル

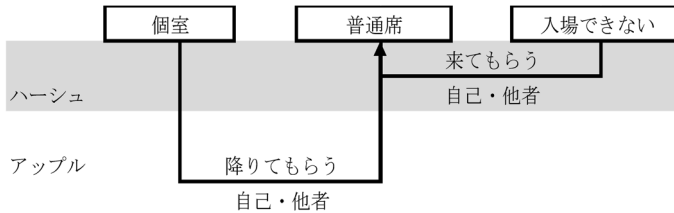


図2 ハーシュとアップルによる公正理解の関係図
筆者より作成

と同じく席で説明すれば、ハーシュは、一つ大きな統合体を前提として劇場のたとえを使いながら、リテラシー教育の対象を、「個室」の高級席、普通席及び劇を見たいけど、劇場には入れない無席（「他者」）の、三つに分けた。ハーシュによる「平等」理解も、「他者」理解と同様であると同時に、「自己」のいる普通席に、劇場に入れない「他者」をどのようにして来てもらうのかに重点をおいている。すなわち、「他者」を弱者としてみるのではなく、「他者」を統合体の一員として、「自己」と同じように考えられるよう、「他者」という身分を無くすことである（図2）。

このように、アップルとハーシュによる「多様性」と「統一」の理解には方向的なずれが存在している。アップルは集団を細分化し、その細分化された多様なものに注意を注いでいる。どのように上位集団が下位集団まで降りてこられるのを考えている。アップルは「統一」を主流文化、「多様性」を非主流文化として認識している。二者択一の図式で、「多様性」に重きを置き、その「統一」と「多様性」の立場を逆転させるために論調を展開している。対照的に、ハーシュは（「他者」にも「自己」と同じように）、「統一」という全体の発展を目標に、「最も恵まれない人々に教育の諸資源の機会を与え、そしてその個人を社会へ帰属させて、最終的に『自己』の価値まで認めてもらう」ことを目標に掲げた。ハーシュは「諸個人の能力の差異（自然的な不平等）」を問題の土台として、恵まれる人と恵まれない人を同時に改善させるのではなく、長期的に恵まれない境遇

が改善できるように、両者のギャップを縮小しつつ、それぞれの社会へ帰属することを認めている。ハーシュは集団間の差異を認めつつも、単にその「多様性」の部分だけを注目するより、「統一」としての全体が長期的にどのように発展していくのかを重要視している。そこに「多様性」と「統一」の相対的なバランスがある。

4 おわりに

今日までの先行研究は「他者」と「統一」の観点から、ハーシュを純粋な保守主義者として位置づけた。本稿は「多様性」と「統一」のキーワードから、「他者」あるいは「統一」だけを強調する多文化主義より進展したハーシュ像を作った。この進展した部分はコスモポリタニズム理解である。コスモポリタニズム論者としてのハーシュは一つの中心を持たず、「多様性」を強調し、さらに、長期に渡る調和的な共生コミュニティを目標としている。この意味で、ハーシュによるコスモポリタニズムは多文化主義を乗り越えたものである。

批判的多文化主義者としてのアップルは社会における集団を「統一」と「多様性」に分類し、この「統一」を主流文化、「多様性」を非主流文化として認識している。さらに、アップルは「統一」と「多様性」の立場を逆転させるため、「多様性」に重点をおくべきであると主張している。つまり、「統一」と「多様性」を二者択一のように位置づけているのである。一方、ハーシュは「統一」と「多様性」の分類で、非主流文化の集団が「多様性」を担保するものとして分離されていることに異議を唱えている。すなわち、ハーシュによる「統一」と「多様性」における「多様性」は人為的に分けられた集団としての認識ではなく、「統一」という広い範囲における多様な集団を指す。これは「多様性」のもとで一部集団を特別視する危険性から脱がれるためである。この考えを出発点とし、ハーシュは「他者」の身分をなくすためにコスモポリタニズムを提唱したのである。

それは「自己」と「他者」の区別を持たない理解である。

以上のように、批判的多文化主義者とハーシュの間にはその姿勢に大きな差異がある。すなわち、前者が「多様性」と「統一」という二元的な議論に終始するのに対し、後者はこうした枠組みから脱却し、より広範な視点から対象に迫っている。ハーシュはアメリカ合衆国を全体として捉え、「自己」と「他者」のどちらだけに偏る論調を有していない。さらに、コスモポリタニズムは客観的な立場から出発し、アメリカ合衆国における全公民の利益を保っている。その目的はすべての公民に平等な機会と良好な教育を与えることである。

批判的多文化主義者との方向性のずれと「自己」と「他者」に偏った議論をしていないことから、ハーシュは先行研究に述べられた保守主義者より、広い視点におけるコスモポリタニズム論者であるともいえよう。その意味で、ハーシュはアメリカ合衆国における五つの多文化主義の流れをより加速させ、より世界的な視点を取った論者であると位置づけられるだろう。

註

- 1) ハーシュによるコスモポリタニズムは、国家や民族という限定した範囲を乗り越える考えであり、人類全体という世界の広い範囲を見渡す視点における考えである。
- 2) ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck) とナタン・スナザイダー (Natan Sznaider) は "A Literature on Cosmopolitanism: an Overview," の論文において、世界の文芸復興から 2006 年までのコスモポリタニズム研究を整理した。ベックらは主に総合性、主題性と関係性の三分類から、これらの研究の系譜を明らかにした。詳しくは以下の表を参照のこと。(Beck, U., & Sznaider, N. (2006). "A Literature on Cosmopolitanism: an Overview," *The British Journal of Sociology*, 57(1), 153-164 を基に作成。)

I. 総合型	II. 主題型	III. 関連領域の研究
論文集	コスモポリタン・デモクラシーの政治	
概観	コスモポリタン・デモクラシーの批判	
思想史	コスモポリタン・シティズンシップ	
規範の世界主義	ヨーロッパ	トランスナショナリズム
方法論的な世界主義	世界都市	グローバリゼーション
社会学	発展途上国, ポストコロニアリズム	
人類学	世界主義的市民社会と新社会運動	
方法論的な民族主義についての議論	世界主義の法律と正義	
実証研究	人道主義の干渉	
世界主義に対する批判	世界主義的記録	
	グローバル文化	
	美学的な世界主義	

³⁾ Apple, M. W. (2006). *Educating the "Right" Way: Markets, Standards, God, and Inequality*, New York, NY: Routledge Falmer.

⁴⁾ Ibid.

⁵⁾ 自分の育ってきたエスニック集団, 民族, 人種の文化を基準として他の文化を判断したり, 評価したりする態度や思想のこと.

⁶⁾ New York State Social Studies Review and Development Committee. (1991). *One Nation: Many Peoples: A Declaration of Cultural Interdependence*, Albany, NY: State Education Department.

⁷⁾ Banks, J. A. (2007). *Educating Citizens in a Multicultural Society*, New York, NY: Teachers College Press, 12; Banks, J. A., Cookson, P., Gay, G., Hawley, W. D., Irvine, J. J., Nieto, S., Schofield, J. W., & Stephan, W. G. (2001). "Diversity within Unity: Essential Principles for Teaching and Learning in a Multicultural Society," *Phi Delta Kappan*, Nov: 196-203.

⁸⁾ Banks, J. A. (2011). "Educating Citizens in Diverse Societies," *International Education*, 22(4), 246.

⁹⁾ Gutmann, A. *Unity and Diversity in Democratic Multicultural Education: Creative and Destructive Tensions*, In Banks, J. A. (ed.). (2004). *Diversity and Citizenship Education: Global Perspectives*, San Francisco, CA: Jossey-Bass, 71-96.

¹⁰⁾ Aangwill, I. (1909). *The Melting Pot*, New York, NY: Macmillan, 1920.

¹¹⁾ 松尾知明 (2013) 『多文化教育がわかる事典』東京: 明石書店.

- ¹²⁾ 藤本龍児 (2009) 『アメリカの公共宗教——多元社会における精神性』 東京: NTT, 190.
- ¹³⁾ 同上.
- ¹⁴⁾ 同上.
- ¹⁵⁾ 同上.
- ¹⁶⁾ 同上.
- ¹⁷⁾ 松尾知明 (2007) 『アメリカ多文化教育の再構築——文化多元主義から多文化主義へ』 東京: 明石書店.
- ¹⁸⁾ 同上.
- ¹⁹⁾ 同上.
- ²⁰⁾ Kincheloe, J. L., & Steinberg, S. R. (1997). *Changing Multiculturalism: New Times, New Curriculum* (Changing Education Series), Buckingham: Open University Press.
- ²¹⁾ 油井大三郎, 遠藤泰生編 (1999) 『多文化主義のアメリカ——揺らぐナショナル・アイデンティティ』 東京: 東京大学出版会.
- ²²⁾ Kincheloe, J. L., & Steinberg, S. R. (1997). *Changing Multiculturalism*.
- ²³⁾ 松尾知明 (2007) 『アメリカ多文化教育の再構築——文化多元主義から多文化主義へ』.
- ²⁴⁾ Kincheloe, J. L., & Steinberg, S. R. (1997). *Changing Multiculturalism*.
- ²⁵⁾ Hirsch, E. D., Jr. (1992). "Toward a Centrist Curriculum: Two Kinds of Multiculturalism in Elementary School," Charlottesville, VA: Core Knowledge Foundation, 3.
- ²⁶⁾ Dowgill, P., & Lambert, D. (1992). "Cultural Literacy and School Geography," *Geography*, 77 (2), 143-151, 147.
- ²⁷⁾ ハーシュは、競争力をすべての子どもに与えるためには、性別、ジェンダー、民族、または地理的要因に関わらず、コア・ナレッジ財団 (Core Knowledge Foundation) を通して、すべての学生に安定して一貫したコア・ナレッジ (Core Knowledge) を提供することが必要であるとした。 (Hirsch, E. D., Jr. (1992). "Toward a Centrist Curriculum," 5-6.)
- ²⁸⁾ McLaren, P. L. (1988). "Culture or Canon? Critical Pedagogy and the Politics of Literacy," *Harvard Educational Review*, 58(2), 213-235; Aronowitz, S., & Giroux, H. A. (1988). "Essay reviews: Schooling, Culture, and Literacy in the Age of Broken Dreams: A Review of Bloom and Hirsch," *Harvard Educational Review*, 58(2), 172-195.
- ²⁹⁾ 松尾知明 (2007) 『アメリカ多文化教育の再構築——文化多元主義から多文化

主義へ』, 95-96.

³⁰⁾ 同上, 98-99.

³¹⁾ 同上, 100-102.

³²⁾ Apple, M. W. (1996). *Cultural Politics and Education*, New York, NY: Teachers College Press, 112-113.

³³⁾ Apple, M. W. (1982). *Education and Power*, Boston, MA: Routledge & Kegan Paul, 133.